

タマネギべと病 (病原菌 : *Peronospora destructor* (Berkeley) Caspary)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害であり、発病株の種類には、越年り病株と二次感染株がある。ネギ、ワケギ、ノビルなどに発生した菌はタマネギに感染することがある。

越年り病株での、被害葉の葉色は光沢のない淡黄緑色で、葉が外側に湾曲し、草丈が低く、最終的には衰弱・枯死する。

二次感染株の病徴は、葉身に楕円形から長卵形の病斑を形成し、病斑上に白色または暗紫色のかびを生じ激しい場合には、全身症状を呈し、衰弱・枯死することもある。

病原菌は、前年秋に苗床や本ぼで感染し、無病徴のまま冬を越して春に発病した越年り病株が伝染源となって二次感染株し、拡大する。

二次感染株は、気温が 15℃程度の多湿条件で発生が助長されるが、5月中旬以降は、気温の上昇に伴い病勢が衰える。り病株の鱗茎などに寄生した菌糸は越夏できず、土壤中卵胞子の形で休眠越夏する。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・発生ほ場では、連作しない。
- ・山口県では、1月中旬から越年り病株の発生が認められるため、二次感染が始まる3月下旬までに抜き取り、ほ場外で処分する。
- ・収穫後は、植物体残さを適切に処分する。

(イ) 薬剤防除

- ・苗床は、土壤消毒を行う。
- ・二次感染の開始時期である3月下旬から予防散布を実施する。
- ・発病を認めた場合は、防除効果の高い薬剤（リドミルゴールド剤、フォリオゴールド剤、ホライズン剤、プロポーズ剤等）により直ちに防除を行う。なお、フェニルアミド系薬剤（FRAC コード：4）（リドミルゴールド剤、フォリオゴールド剤）は耐性菌出現防止のため、作付期間中1回程度の使用にとどめる。



越年り病株(発病初期)

越年り病株(枯死直前)

二次感染株の病斑